

角瀬先生が悪人と呼ばれた頃

富沢 賢治

かつて角瀬先生は「悪人」と呼ばれていた。黒川俊雄先生（協同総合研究所の初代理事長）と私を加えて、「関東の3悪人」と称された。

黒川先生は2013年に永眠された。そして昨年、角瀬先生が逝去された。残された私が最後の「悪人」となった。このさい、悪人説の背景について説明しておきたい。

2002年10月に開催された非営利・協同総合研究所の設立総会で、角瀬先生が理事長に選出された。同年発行の『研究所報』第1号で先生は、こう書かれている。

「今日、非営利・協同セクターが大きな力をもつようになってきていることは、誰も否定できないものとなっており、ようやく労働運動の側からも、非営利・協同組織との連携ということの意義が認識され始めている。これまではとかく観念的、教条主義的な批判がみられないでもなかったが、そういうことでは支配体制側からの総合的な戦略の展開に対抗することができないということが気付かれ始めたものといえよう。」（『いのちとくらし・研究所報』第1号、2002年、4ページ）。

角瀬先生は、長期間にわたり労働組合と非営利・協同組織との連携の必要性を強調されていた。そ

のような主張が批判の格好的とされ、一斉射撃を浴びたのである。とりわけ労働者協同組合を支援する研究者として、黒川先生と私とともに、「関東の3悪人」というレッテルを貼られ、強い批判を労働組合運動側から浴びることになった。

たが、先生は、「労働者協同組合の現状と課題」（法政大学経営学会『経営志林』32巻3号、1995年10月）、「労働者協同組合の基本問題」上、下（同上誌、39巻2号、2002年7月と、39巻3号、2002年10月）などで、じつに粘り強く丁寧に「観念的、教条主義的な批判」にこたえてきた。

このような、先生の生涯をかけた理論活動と、現実の労働者協同組合運動の実践活動が相まって、ついに2020年12月、議員立法である労働者協同組合法が全会一致で成立した。生前の先生のお喜びはどれほどのものであったろうか、はかり知れない。先生の研究活動の成果は、じつに実り豊かなものとなった。

いまや先生を「悪人」と呼ぶ人は一人もいない。

（とみざわ けんじ、研究所顧問、一橋大学名誉教授）